

## 令和3年度第4回国分寺市青少年問題協議会

日 時：令和4年3月30日（水） 午後1時～

場 所：市役所 第三委員会室

出席委員：宮田万利子（会長）、成瀬大輔（副会長）、中村俊雄、田中久美子、彌永大介、青木伸道、田中芳幸、辻川幸広、薄井芳典

事務局：子ども家庭部子ども若者計画課（千葉課長・豊泉係長）

傍 聴 者：なし

会 長：それでは本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。定刻になりましたのでこれから協議会を始めたいと思います。協議会を開催するに当たり本日の協議会の成立について事務局のほうから報告させていただきます。お願いいたします。

事務局：本日の協議会の成立について御報告いたします。出席委員9名、欠席委員の方2名になります。委員の過半数の出席がございますので国分寺市青少年問題協議会条例第5条の規定により本日の会議が成立することを確認いたしました。

よろしくをお願いいたします。

会 長：はいありがとうございます。開催の確認が出来ましたので、これより令和3年度4回国分寺市青少年問題協議会を開催いたします。では次第に沿って本日の協議会を進めたいと思いますが、次第に入る前にまず事務局のほうから資料の確認をお願いいたします。

事務局：ではお手元の配付資料の確認をさせていただきたいと思います。まず次第をお配りしておりますが、次第の他に今日の勉強会の講演会の資料であります「地域で優しく育てよう子どもの心」。それから「令和3年度第2回国分寺市青少年問題協議会の議事録」。それから前回の「令和3年度第3回国分寺市青少年問題協議会の議事録」、こちら未定稿になっておりますので御確認をいただきまして、修正等ございます場合は4月14日までに御連絡をいただければと存じます。どうぞよろしくをお願いいたします。以上でございます。

会 長：ありがとうございます。それでは次第2に入ります。本日は第4回国分寺市青少年問題協議会の勉強会ということで今期のテーマ「地域で優しく育てよう子どもの心」についての勉強会を行います。今日は勉強会として講演会をさせていただきまして、講師として東京学芸大学准教授柴田彩千子先生にお越しいただきました。ありがとうございます。

先 生：よろしくをお願いいたします。

会 長：それではお願いしたいと思います。

事務局：本日の講師の柴田先生について御紹介させていただきたいと思います。柴田先生は国立大学法人東京学芸大学教育学科学部博士准教授でいらっしゃいます。日本女子大学の専任助手、帝京大学准教授を経て2015年より東京学芸大学で活躍されておられます。子どもに関わる活動といたしましては三鷹市教育子育て研究所研究員、八王子市教育委員、小金井市子ども家庭支援センター運営協議会会長、川崎市青少年問題協議会委員などを務められておられます。昨年と今年度の国分寺市、小平市、小金井市と学芸大学連帯講座をさせていただいているんですが、その講座の中でも支援者とはという題で講座を柴田先生にさせていただきました。また研究テーマが地域づくりと教育、家庭、学校、地域の連携等や子育て中の女性の学習等とのことでしたので、お忙しい中に講師をお願いした次第でございます。本日は今期のテーマであります「地域

で優しく育てよう子どもの心」今期のテーマが決まりましたので、このテーマについて今後協議していくわけですが、本日の勉強会がさらに機能を深めるきっかけになればというふうに思っております。それでは柴田先生どうぞよろしくお願い申し上げます。

先生：ただいま御紹介にあずかりました東京学芸大学の柴田と申します。改めましてよろしくお願いいたします。国分寺市が大学とかなり近いということで、学生がたくさん国分寺市さんにはお世話になっています。特に国分寺市の公民館で社会教育実習やそれから千葉さんにもお世話になりまして、学童保育所での社会教育実習では本多とそれから西国分寺にあるいずみ学童保育所で学生がお世話になっております。それから公民館などで学生たちがいろいろイベントをさせていただいたりとか、放課後の学習サポーターをさせていただいたりとか、たくさんお世話になっております。私自身も特に公民館にお世話になっておりまして、学芸大に赴任して最初の年にもまち公民館で豊泉さんと出会って、そちらで学生もお世話になっています。私自身は本多公民館のサポーターという立場で関わらせていただいたり、それから国分寺市の『くぬぎ教室』40数年続いてます障害を持った方の青少年教室というところにも関わらせていただいています。本日は皆さんと一緒にいろいろ意見交換をしながら、楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします。すいません着席で進めさせていただきます。

「地域で優しく育てよう子どもの心」という協議題をうたいまして、地域で子どもたちを優しく育てるっていうのはやはり大人たち、この子どもとかかわる様々なおとな方たちがどのようにどのようなマインドで子どもたちに関わっていけばいいのかという事やそれから最近の学校の動向、チーム学校というふうに言われておりますけれど、学校の教職員だけではなくて様々な立場の地域の大人たちが学校に通う子どもたちに積極的に関わっていくことが今求められている。そういった背景についても触れていきたいと思っております。こういった学校と子どもたち、そして地域の大人たちを結ぶキーマンとなる地域コーディネーターの役割という事と、最後には、支援者としての大人のやりがいと成長という観点を皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。まずは子どもを支援する大人について、小学生をイメージしていただくともまずはわかりやすいと思っておりますが、皆様方と一緒に考えてみたいとおもいます。こちらのイラスト、イラストというか写真やイラストですけれどもこちらですね家庭をイメージした写真です。家庭というところは子どもにとって主たる居場所です。家庭教育が行われる場所でもあります。家庭教育っていうのは、教育という事象を三つに類型化することができるのですが、例えば一つ目はフォーマル教育。フォーマル教育というのは学校教育の事を指します。学校教育というのは法律でしっかりと位置づいた教育です。二つ目はノンフォーマル教育と言いまして、学校教育以外の体系的で組織的な教育をノンフォーマル教育っていいです。例えば地域で子どもたちを対象に行っている様々なイベント的な学習会であるとか、それから図書館とか公民館、郷土資料館などがやっているような様々な講座、習い事もそこに含まれます。こういったものがノンフォーマル教育。学校教育以外の組織的で体系的なものです。

そして三つ目がインフォーマル教育です。インフォーマル教育っていうのは最初の二つ。フォーマル教育とノンフォーマル教育とは違って組織的ではない、そして体系的ではない、いわゆるカリキュラムのない、そういう日常の中に織り込まれたような教育の機会をインフォーマル教育と言います。子どもたちにとってインフォーマル教育の最たるものは何かというとやはり家庭教育です。家庭教育の中ではカリキュラムもないですし、時間割もないですし、特に集団的で行うものではない日常生活の中で知

らず知らずのうちに主に保護者から子どもに施されるものです。その中で例えば乳幼児のうちから例えば食卓での会話を通じてコミュニケーションが培われたり、言葉の発達というのがあったり、それからそこで遊びということもとても大事な要素になるんですが、特に乳幼児、子ども小学生のうちにとことん遊びこむという体験をすることで、またこの後お話ししますが、非認知能力、非認知スキルというものが育まれる素地ができてます。例えばイラストのように家庭でカードゲームを親子で一緒にやっ  
ていろいろなルールを学んだり、規則性を学んだり、もちろん楽しく会話をしながら遊んだり。例えば親子で地域の図書館を訪れて絵本にふれたり、それから食事をしながら今食育と言いますが、その食に関する事を家庭で学ぶというところちょっと大げさかもしれませんが、日常を通してこういった毎日の些細な行動から子どもたちが身に着ける、という事がとても後の子どもにとって大きな素地となるものと思います。こうやって考えてみますと、まずはこうした日々の家庭での取組の積み重ね一つ一つの積み重ねがまずは子どもを形成しているというふうに考えられまして、子育て環境っていうのは家庭の保護者がどういう人だったか。それからもうちょっと子どもの行動範囲が広がっていくと地域でどのような大人たちに触れたかということや学校でどのような先生方とふれたか、というように子どもを取り巻く大人の環境そのものだと捉えることができると思います。まずは青少年、子どもの育ちを考える上で家庭教育っていうことは大事に考えていかなければならない領域という事になります。ところで子どもにとってどんな家庭が幸福感をもたらすのかっていうことを皆さん考えてみてください。どのような家庭だと子どもの幸福感というものが増すと思いますか。いかがでしょうか。もしよろしければ、どなたかご意見いただければと思います。

委員：よく褒めてくれるとか。

先生：よく褒めてくれる。認めてくれるという事ですね。大事ですね。しっかりお子さんを見てるという事になりまね。褒めるという事は。

委員：家族の仲が良い。

先生：家族の仲が良い。そうですね。みんな笑顔で、仲が良いと笑顔になりますね。あといかがでしょうか。

委員：一緒に遊びなり会話をしたりして、一緒に時間を過ごす。

先生：一緒に親が時間をつくってくれて、一緒に過ごしてくれる。時間をたくさん共有する。

委員：両親の仲が良い。

先生：両親の仲が良い。そうですね、喧嘩ばかりしている両親より仲の良い両親をみて育った方が絶対子どもには良いですよ。

皆様に挙げていただいた意見全てをそのとおりというふうに思います。私もいろいろ仕事柄子どもにとってどんな家庭が幸福感を増幅させるのだろうかという事を考えるのですが、私も今小学校6年生もうすぐ中学生になる子どもがいるんですけども、子どもにダイレクトに子どもが幸せになる家庭ってでどんな家庭だと思うっていう風に聞いたんですね。やっぱり子どもってシンプルに物事を考えるんですけども、そういえばテレビ番組を子どもが見ていて、ある子どもが自分の家族の事を思うといつも心がほっこりするって言うんですね。子どもにとって自分の家族をイメージしたときに何となく心がほっこりする、安心する。こういう家族というのが子どもにとって幸せってことなんじゃないのと娘に言われて、ついつい大人は最近自己肯定感の高い家庭とか非認知能力、非認知スキルを高めるような家庭とかそんなふうに思っちゃうんですけど、そうなんだシンプルにそう考えれば良いだけなんだと気づかされました。次に子どもを支援する大人ですけども、今家庭の話をしましたけど、子どもによく関わる大人としては学校の先生ですね。このイラストは授業をしているところで座

学の授業，それから音楽の授業のイラストと写真です。特に小学校の場合は子どもと多くの時間をともにする担任の先生が子どもにとって大きな大人としての存在となります。現在小学校では教科担任制の導入というものが検討されていますのでこれからの子どもたちというのは担任の先生と1日過ごすという事ではなくて，教科担任制が導入されるといろいろな先生と中学生のように過ごすということになるのではいかと思います，やはり担任の先生をはじめ学校の先生というのは子どもにとって大きな存在であります。

その子どもと大人の間を整理したものがこちらの図になります。今まずあげました保護者と教師というのは子どもにとってはいわゆる縦の関係性にある大人と捉えることができます。とても太い絆で子どもと結ばれている存在であり，子どもたちの保護者は子どもたちの生活全般を左右する存在ですし，教員は子どもにとっての学校教育に深く関与して子ども通知表というものを毎学期付けますので子どもを評価する存在となります。このように子どもにいわゆる理解関係，評価をしたり，生活を左右したりする事に関わる大人というのは子どもにとって縦の関係にある大人になっています。

子どもにとってこの縦の関係にいる大人との関係性というものは重要なものなんですけれども，こればかりだと子どもは息苦しくなってしまう。

そこで，子どもにとって縦の関係とそれからお友達，子ども同士の関係の横の関係それだけではなくて斜めの関係というものがとても重要な子どもの育ちにとって役割を持つと思います。斜めの関係性というのは友達同士のようフラットな関係ではないし，また子どもにとって自分を評価したり生活を左右するような縦の関係にいる存在でもない，子どもの育ちを側面から温かく包み込んでくれるような大人たち，いわゆる支援者です。こういった方たちが斜めの関係と言われています。

理想的な地域社会には子どもを取り巻く大人たちが全員斜めの関係であり，子どもを応援してくれる大人であることが理想的な社会と思います。

例えば子どもにとって斜めの関係の大人たち，青少年問題協議会の委員さんも子どもたちにとっては斜めの関係です。子どもたちの育ちをしっかりと議論して考えてくださる存在ということで斜めの関係にいる大人の皆さまと位置づけることもできますし，例えば子どもにとって身近なところでは登下校を見守る地域の大人たちも交通安全や，それから「行ってらっしゃい」とか「おかえりなさい」と声を掛けくれる存在。

例えば，図書館の司書さんにお薦めの本を聞いたりとか，教えてもらったり，そういった学校以外の場所で関わる大人たち。それから，例えば学校の中でも教職員ではない大人たちとの関わり。様々な斜めの関係性の大人たちが子どもの周りにはいらっしやいます。

こういった大人たちに日常生活の中で子どもたちが安全性を確保してもらったり，声をかけてもらったり，それから何か相談事をするような大人たちであったりとか。こういった大人たちの存在がたくさんあることで，子どもたちが大きくなった時に，地域に育てられたというような感情を持つものと思います。

次にチーム学校における斜めの関係性。支援者の役割について考えていきたいと思えます。

先ほどお話ししました例えば図書館の司書さんの話や，登下校を見守る大人たちの話というのは一例にすぎませんが，このような子どもたちにとって斜めの関係性にある大人というのは，子どもにとっては子どもの生活に深く影響を及ぼさない，また子どもを評価することのない存在です。また同年代の友達のような横の関係性になる方ではありません。こういった子どもにとって斜めの関係性にある大人というも

のが、子どもにとってどんな役割を果たすのかって言う事について、特に学校というところを中心にお話ししていきたいと思います。

最近「チーム学校」という言葉をよく耳にするとと思いますが、「チーム学校」が何かというと、こちら文部科学省が出している文章から抜粋したものです。特に赤字の部分を御覧いただきたいのですけれども、いわゆる学校で最近ではですね地域で運営する学校。コミュニティースクールといいますが、国分寺市にも数校あります。国分寺市でも設置されているコミュニティースクールというのは、学校運営協議会を設置する学校の事を言います。

この学校運営協議会っていうのは、協議会ですから協議をする組織ですけれども、従来は学校運営するのは教育委員会と教職員、特に校長のリーダーシップによって行われるものですが、その学校運営というところに、保護者の代表者、それから地域の代表者の方が、学校運営の主体者として位置づいて学校を地域とともに運営する。これがコミュニティースクール、地域運営学校といえます。

この地域運営学校、コミュニティースクールの委員さんは非常勤の地方公務員の特別職というような位置づけになります。ですので、守秘義務というものももちろん課される存在ですので、様々な子どもの育ちに関する個人情報まで踏み込んで、教職員と一緒に話し合っ、地域でどういうふうに子どもを育てていくのか、という事を協議して、それを地域に説明をするという役割を担った方たちです。

教職員の人事に関する意見具申を教育委員会に直接することができるという権限も持っていますが、全国的にコミュニティースクールではあまり行使されていないように思います。

例えば、学校の経営っていうところにはコミュニティースクールの委員さん、地域の方たちが入っていったりとか、それから赤字で示した部分ですが、ちょっと読ませていただきますが、「教員と多様な専門性を持つ職員が一つのチームとして、それぞれの専門性を生かして連携協働することができる」と管理職のリーダーシップや校務のあり方、教職員の働き方の見直しを行うことが必要である。」

学校がもはや地域の学校を単体で動かしていくのではなくて、チーム学校として様々な専門性、例えば社会福祉士や心理士など様々な方たちの力を借りながら連携、協働というのが大きなキーワードになるんですけれども、みんなで地域の学校をつくっていき、地域の子どもを自分たちの地域で育てよう、というのがこのチーム学校の根幹にある考え方です。そのチーム学校の考え方に沿って、近年では地域の小学生・中学生を一体的に育てようという事で、公立の小中一貫教育というものが進められています。国分寺市でも小中一貫教育が進んでいると伺ってますけれども、いかがでしょうか。地域会議っていうのは小中一貫教育学区の中で、一つあると聞いたんですけれども。

事務局：現在、教育委員会の方では、昨年度は小中一貫校の研究を始めて、どういうふうにしていったらいいかというのを、いま検討しているような状況だと思います。小中一貫校として画一がしっかり出来たかはすいませんどうかわからないんですけど、そういう検討し、そういう方向で進めていくような話は出ています。

先生：ありがとうございます。小中一貫教育ですねその義務教育過程にあるお子さんを地域でしっかり育てようという考え方です。最近では小学校と学区の中学校をつなげてそこで教員同士が交流を図りながら研修したりとか、小学生と中学生と一緒に行事をやったりっていう形で緩やかに進められていたり、それからもう校舎を一体型にして公立学校で義務教育学校という名の基に小中一貫校を生じさせている自治体もこの辺りにたくさんあります。

私、八王子市の教育に関わっているんですけども、八王子では義務教育学校を一昨年オープンしまして従来の小学校中学校一体型の校舎ですけど、今後もここ数年の間に義務教育学校数校を設置する予定になっています。

またこういう事をやると子どもたちにどんなメリットがあるというのと、今まで中1プロブレムと言われているんですけども、中学校1年生になって不登校率がグリーンと上がっていたりとか、それから勉強がいきなり中学生になって難しくなる。その背景には授業のやり方が小学校6年生まで中学校1年生からの授業と全く方針が変わるんですね。それは教員の問題もありますけども、小学校の先生と中学校の先生はやっぱり雰囲気全然違うと思います。

その小6から中1の移行の段階を緩やかにしていくという事で、例えば従来の小学校1年生から4年生ぐらいを一つのかたまりで、小学校5・6・1年生を一つのかたまりにするような、そんな教育課程を作っていこうというところなんです。今話を伺いましたら国分寺市もそういった流れに向かっていくように今議論をされていると教えていただきました。そういった教育を実践していくためには、いろんな地域の大人たち、子どもにとっての支援者の存在が必要となってきます。

こちらのスライドを御覧ください。教育支援者の現状を表にまとめてみたものになります。

教育支援者っていうのは家庭教育、学校教育、社会教育など全ての教育対象者を支援する職に従事する人々の事を言います。こちらの表では多岐にわたる教育支援者がいますけれども、その中でも特にチーム学校時代の教育支援者に特化して焦点を当てて、学校経営というものに関わる教育を支援する人々の現状について、学校経営の課題別にまとめたものでございます。特に表の中で黄色の網掛け部分でお示した支援者の多くは、特定の機能や資格を持った専門職者ではなく、支援者としての子どもを育てようというマインドを持った地域の大人たちによって担われています。

例えば、総合型地域スポーツクラブがありますが、最近中学生の部活動支援というのが教員の働き方改革と相まって、各自治体で進められています。総合型地域スポーツクラブのスポーツという名前ですけども、そこには文化活動、文化部のような活動も含まれていまして、こういった地域の大人たちの様々なスポーツのサークルとか文化部のようなサークル、こういうところが子どもたちの放課後を支えるような活動をするという事で、子どもたちの放課後支援、部活動支援というところで注目されている組織となります。それから教育課程のきめ細やかな充実という事で、地域の大人たちが学習サポーターを担っている。学習サポーターと言うのは、例えば放課後の子ども教室などで子どもの宿題をみてあげたり、苦手なところをみてあげたりみたいな支援者の方。それからその下の地域学校協働活動推進員とありますが、いわゆる学校と地域をつないだ活動を推進していく上で、いわゆるコーディネーターとなる人を地域学校協働推進員と言っています。例えば、この近隣の三鷹市ではコミュニティースクールの先進地域です。三鷹市では東京都でも早い段階で全校をコミュニティースクールにしまして小中一貫教育を進めている自治体です。その中学校区を学園というふうに呼んでいまして、いろいろその地域に因んで例えば連雀学園とか大沢学園と学園を中学校区にしていまして、その中で小中一貫教育を進めるこの地域学校協働活動推進員という方々が活躍しています。

令和3年度から新しい試みとしまして、放課後の中学生の部活支援という事で単なるスポーツとか文化部というような従来型の部活動ではなくて、地域で子どもたちのアントレプレナー教育というものを進めています。アントレプレナー教育というものは、いわゆるその子どもたちの起業家教育を学校先生と地域が一体となって進めていて、

具体的には三鷹市四中の敷地の中で、サツマイモを苗から放課後の中学生が育てまして、そのサツマイモを育てる過程では地域学校協働活動推進員さんのコーディネートした大学の農学部の教員が来て、農業の講座をしています。その育てる過程では地域の様々なボランティアとか学生のボランティアと一体となって育てていくんですけども、その出来た収穫されたものを今度は商品化していきます。その商品をする過程で地域の商工会議所の方々と連携をして、例えば今年度の場合は製粉会社の方たちやお菓子店の方たちと共同しまして、さつまいもを粉にして、それでケーキを作り、商品名を考えて、そこにデザイナーの方も入ってパッケージデザインを子どもたちと一緒にして、最期商品化をしてその商品化する過程でいろいろ会計管理みたいな事も子どもたちがするように、そこに保護者で銀行員が来てくれて、アドバイスをしながら販売をする。それで会計、決算をする。

このように様々な形で部活動、これは特異な例かもしれませんが、学校に地域のいろんな立場の方たちが入ってくる。一緒に子どもを育てる。そういう世の中になっていくっていうのがイメージされるかと思います。そういった過程では地域企業とかNPOというような組織の方もどんどん関わってくることになるかと思います。

それから次に教員が教育課程に専念する環境というものも最近では特に重視されています。

特にいじめ問題について教員がしっかりと子どもを観察する時間が必要になってきます。もちろん授業も大切なので、授業研究も教員の大きな仕事なんですけども、いろんな雑用で時間を使ってしまうのではなく、しっかりと子どもと向き合う時間確保するために、教員が教育課程に専念する時間をつくっていくことが求められている。

教員をサポートする上で求められる支援者は、例えばこちら側の写真にあるように校外学習に出るときに、子どもの安全を見守るために地域の方が同伴して一緒に電車に乗ったりとか、子ども脱水症状になってないとか、きめ細かく見守るような大人たちであるとか、それから右側は理科の実験をしています。理科の実験の時間はすごく準備と後片付けに時間がかかるので、ここをサポートして下さるようなサポーターの方、それから家庭科で裁縫をやったり調理をしたりするときに子どもの安全を見守ったりする各グループに付く大人の方や、いろんな関わり方がありますが、こういった大人たちが学校教育に入っていった積極的に関わっていく。

そうすると、教員も子どもたちをしっかりと見ることができる。例えば、いじめ問題。国分寺ではあまり大きな事件は聞きませんが、重大事件になる前に教員がしっかりとそこに介入できるような環境ができます。

次に部活動の支援も、先ほど申しました斜めの関係にいる大人が活躍をしています。それから最近では先ほど三鷹市のお話をしましたけれども2017年度からは校長の監督を受けて部活動の技術指導やスポーツの大会とか吹奏楽の大会などへの土日の引率などを行う事を職務とする活動指導員という方々が、学校教育法の施行規則に新たに規定されています。

ちなみに部活動指導員の職務っていうのは、実技指導はもとより学校外での活動の引率であるとか部活動の会費などの管理運営、それから保護者への連絡、年間あるいは月間の指導計画の作成、それから例えば事故が発生した場合の現場対応など多岐にわたるもので、大きく教員をサポートするというふうになっています。本当に教員が一番働いている。世界的に見ても勤務時間が長いと言うふうに言われていまして、特にそれは中学校の教員なんですけど、その大きな原因というのが部活動に関わる時間。そこを支援してもらおう。何度も申し上げますが、それは教員を支援するという以上に、教員が子どもをしっかりと見ることができる時間を増やすという事が根底にあって作

られた規則です。

次に個に応じた支援を充実していくために斜めの関係性にいる大人たちが、子どもたちや学校に積極的に関わることが求められています。

例えば、専門職者で言いますと、イラスト・写真のスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーが大きな役割を担っています。スクールソーシャルワーカーは児童虐待とか学校外での非行問題、家庭が原因での不登校など学校の枠を超えた問題の解決に向けて児童や生徒、あるいは保護者に寄り添った支援を行っています。社会福祉分野の専門的知識や技術を持っているという観点から、個別のケースに即した実効性あるの支援を行っている方たちです。

スクールカウンセラーは毎日学校には配置されていないと思うんですが、週に1回くらいのペースで学校を訪れて、児童や生徒に対する面談をして保護者からの相談対応をしたりとか、例えば事件や事故あるいは自然災害などが起こった際の児童や生徒の心のケア、それから教職員対象の研修や相談など多岐にわたる業務を行っています。そのスクールカウンセラーのさらにアドバイザー的な役割を担っている学校心理士スーパーバイザーの役割を置いている自治体もあります。国分寺市は、いかがでしょうか。

事務局：必要に応じてお願いすることはあったと思いますが、現在は常勤ですぐに何かを相談できるような状態ではないかと思えます。

先生：ありがとうございます。国分寺市のお子さんたちは、すごく安定しているというふうには外から伺っています。この個に応じた支援の充実ということで、個というのはいろいろな個性を持ったお子さんたちと向き合う専門家ですけれども、例えば障害を持っているお子さん、困難な課題を抱えるお子さんの支援もしっかり行っていかななくてはならない分野だと思います。まずは困難を抱えるお子さんの存在を地域、そして学校保護者との連携によって自治体の関係部署や支援団体、例えば子どもを見守るいろいろな地域組織、NPO、こういったところが把握することが必要になります。

例えば、私の関わっています川崎市では約40年にわたって障害を持った子どもと保護者と教職員の有志の会という「豊かな地域療育を考える連絡会」という組織がありまして、そこで特別支援教育を専門とする教員や支援員、療育センター・行政の関係者、保護者が一堂に会して毎月定例会を開催して、子どもの療育に関わる情報を共有したりとか、定例会の中で研修会を行ったり、例えばてんかん発作に関する研修会とか、コロナ感染から子どもを守るとか、子どもの性に関するものとか、様々な研修会を開催しています。加えて、そのために部会というものがあって、放課後ダイサービスの部会、障害を持ったお子さんの放課後を充実させるような取り組みを行ったり、保護者をサポートする保護者の会などがあります。

国分寺市で私も関わらせていただいている「くぬぎ教室」という障害をもった方々の青年学級ですけれども、「くぬぎ教室」も40数年の歴史を持つもので、もともとは中学校の特殊学級というふうに言いましたけれども、そこに通う地域の中学生の保護者の方が公民館で講座をやって、それが基となって今の「くぬぎ教室」がつくられ、学卒後の障害を持った青年の方たちの地域の居場所作り事業に発展して今に至るという経緯をもった活動です。国分寺市の「くぬぎ教室」の年齢層を見ますと、10代20代の方たちが少なく、ほとんど40代、50代、60代、70代の方たちリピーターが多いです。

若い特別支援学校を卒業したばかりの方たちの参加がないということはニーズがないのかなというふうに思っていて、障害を持っておられる保護者の方にお尋ねしたのですが、それは決してない。情報がいきわたっていないという事を言っていました。



その10代20代の障害を持っている方たちのほとんどが学校を卒業すると作業場のようなところでお仕事をして、終わると家庭に帰るといように、作業所と家庭との往復の生活があって、作業所では基本みんなでコミュニケーションとして仕事をするということよりは1人で黙々と手仕事をしたり、お掃除をしたり、ポスティングをしたりという事をやっているの、ほとんど会話をしない。家庭に帰って家族と話しをする。特別支援学校に通うまでは地域や学校がサポートしてくれるんですけども、その後の支援がブツリと切れてしまって、「くぬぎ教室」はあるのだけれども、なかなか情報がいきわたらない。

そして「くぬぎ教室」側のスタッフからは若い人たちの参加はどうやって促されるのだろうかというようにお話が出ていて、国分寺市ではそこを促すように、障害を持った若者も地域で楽しく余暇生活を過ごせるような環境があるといいなあと考えています。もしよろしければそのあたりも取り組んでいただければと思います。

次にコーディネーターの役割をお話したいと思います。先ほどコミュニティースクールの話をしました。ややこしいのですが、コミュニティースクールのコミュニティとスクールを逆にするとスクールコミュニティとなり、意味合いがちょっと変わってきました、学校を核とした地域づくりとなります。この学校を核とした地域づくりに欠かせない存在が地域のコーディネーター。先ほど少し紹介しました地域学校協働活動推進員を配置している自治体もありますけれども、地域と学校を結ぶ地域コーディネーターが必要不可欠となってきます。

ここで現代の子どもたちの状況ということについてご照会したいと思います。経産省の調査なんです、将来希望する職業があると答えが小・中学校時代が約90%高校2年生になると80%になり、大学入学後だと65%。普通は学卒が近づいてくるに従って、自分が就きたい職業が大きなイメージから具体化していくようなイメージを持って子どもが育つのが理想なんです、ちょっと逆の傾向があって、これは毎年同じような結果がでています。

また将来についてははっきりとした目標を持っている、というのは、小中学校時代が90%、高校2年生になると80%、大学になると65%というふうになります。ここから就業時期に近づくにつれて将来に向けた目標を見失ってしまったり、夢のようなものを見失う傾向にあります。これは若年層の早期離職の問題にもつながります。若年層の早期離職については従来から「七五三現象」というふうに言われていまして、中学校を卒業して就職した者の7割は3年以内に離職してしまう。高校卒業後に就職した者の5割が3年以内に離職する。そして大学を卒業して就職した者の3割以上が3年以内に離職する。こういう傾向を「七五三現象」といい、若年層の早期離職の問題を語る時に言われています。

そこで、地域の子どもたちをこういった観点で支援する教育として「キャリア教育」という取り組みがあります。今からお話するのは中学校におけるキャリア教育の事例です。

従来は「職業指導」とか「進路指導」と呼ばれていたものが、最近では学校現場で「キャリア教育」と言われ、取り組みがなされています。現行の学習指導要領でも「キャリア教育」が大変大きな位置づけを持っていまして、小学生・中学生のお子さんの方がご存じかもしれませんが、「キャリアパスポート」という取り組みを行っています。

この「キャリアパスポート」というのは、子どもたちが将来に向けて受けてきた職業に関する又は将来の生き方に関する記録を小学校の段階から中学校、高校と継続的に書いていくシートです。小学校から中学校に引継ぎし、中学校から高校に引き継ぐも

のです。

「キャリア教育」というのは、いま日本に3万種類の職業があるというふうに言われているんですけども、学校の教職員は「キャリア教育」を実施しますが、ほとんど教員以外の職業を知らないんですね。しかし、子どもたちが将来就く職業というのは多岐にわたるもので、職業に就くまでの過程でいろんな試行を行って、自分の現状も照らしながら目標を定めていったりとか、それからやりがいと達成したいことを定めていく過程が重要だとして、この「キャリア教育」を教職員というよりは地域の方たちがしっかりとサポートをしていこうという機運が高まっています。

人は何のために働くのかと考えた時に、例えば年齢層によっても働く事の意味も違うと思います。若い頃と、それからその家庭を持った頃、定年退職が近づいた頃、それから定年退職を迎えた後。働くという事は、職業を持つ事だけではなくて、子育てをする主婦も立派な職業とみなして、子どもたちのキャリア教育に取り組む。

この写真はある中学校でキャリア教育を行っているものですが、キャリア教育に取り組むNPOと大学と企業などとの連携によって行われています。

子どもたちは体育館で1人の職業人や大学生の話を20分間ガチンコトークで聞きあって、その中で中学生の時、その社会人の方がどのような生活をしていたのかとか、将来どのような目標をもっていたのかとか、その職業に就くためにどういう取り組みを行ってきたのか、場合によっては資格を取ったのか。いま働いている仕事の中で生き甲斐は何か、それから苦勞をすることは何か、落ち込んだ事・失敗したことは何か、様々なことを大人たちと語り合っています。

これは一つグループが20分間話し合ったら、また次の社会人に聞くというふうになるべく多くの社会人の職業観とか勤労観に触れあう、そんな時間を中学校の総合的な学習の中で行っています。このジャージの色が違うのは縦割り班になっていて、1年生から3年生までで一つのグループを作っているいろいろな社会人のお話を聞いています。学校は1時間が50分授業なんですけれども2時間の中でだいたい4人の社会人の方たちと出会ってトークをして、そこで子どもたちが気づいたこと、考えたこと等を最後の他の生徒さんたちにプレゼン紹介をしています。その中で自分が聞き取ったことを、他者にしっかりと伝えるという練習もしています。

こちらの授業は「キャリア教育」に取り組むNPOがいろいろな社会人の方たちと子どもたちを繋げています。子どもたちと大人たちがしっかりと話し合う斜めの関係性の話し合いになるのですが、その中で子どもが立派に見える大人たちでも失敗談をしっかりとしてくれるので、大人たちも自分たちのような時期があったんだと気づいたりしながら、自己肯定感が育まれていくようです。子どもと斜めの関係性にある社会人講師が話あっていくということを通して、様々な絆を見せてくれる社会人講師との出会いというのが必要になっています。

このコーディネーターの役割ですが、NPOが担っていますのですが、学校と教員、地域、社会人講師を繋げるのですけれども、この授業では先生は側面から子どもたちを見守るだけなんです。その見守る時にこの子はこんな発言をしていて、授業の中では見せないような姿があると気づいたり、普段の教育課程とは違う子どもの様子をしっかりと観察してもらおうようにしています。

それから双方のニーズをつなげるということがコーディネーターの役割ですが、例えば学校側としては教員が忙しくていろいろな社会人とコーディネートできないということや、それからコーディネートをしてもらってもその方たちのフォローですね、いろんな傷害保険の手続きとか御礼状の手続きができない、そこをNPOが担います。

また社会人講師はボランティアで務めてくださっているのですが、自分の仕事を客観

的に子どもたちに解るように説明することで、自分自身の職業生活をしっかり精査して振り返ることができる。そして、これからの人生設計を考える一つの機会となるという点で社会人講師のニーズがあつたりします。

ただ社会人講師はどんな大人でもいいかというところ、そうではないので、そこでの人物保障というところは本当に子どもと繋いで良い大人なのかというところを見極める。例えば、どんなに立派な仕事をしていても子どもの意見を否定したりとか、子どもを馬鹿にしたりとか、例えば「君たちはまだ分からないだろうけれども、こうなんだよ」というような話し方をするような大人を本当に繋いで良いのかという事になりますので、そこは、NPOがしっかりと事前研修をする。

それからボランティアで活動して下さった社会人講師の方に、子どもたちの感想文をまとめてフィードバックする。そうすると、自分の気づかなかつた自分の視点というものを 社会人講師の方は学び、自己成長に繋がるという意見をいただきました。子どもと楽しく関わる為には、やはり家庭や地域で生活をしたり仕事をしたりしている大人をみて成長するというのが理想的です。疲弊した大人を見て育つ子どもと、生き生きとした大人を見て育つ子どもでは日常的に将来への展望が全く違うことになるのではないかと思います。

まずは子どもを幸せにするためには、斜めの関係性にある大人や縦の関係性にある大人たち自身が毎日楽しく過ごすことが必要なのではないでしょうか。人生の学びとか働くことの楽しさややりがい、苦勞を子どもたちに伝えていくことも重要なのではないのでしょうか。いろいろな大人の多様な生き様とか価値観、職業の情報なども斜めの関係性の大人たちと日頃から関わることによって、子どもたちに伝達するという事にも繋がります。例えば、地域の退職をされた高齢者が子どもの支援をされているんですが、こういった方たちが退職前にどんな仕事をしていたのか？なんで退職をした後こういう活動をしていたのか？という話を子どもたちにすることが、子どもたちにとって有意義な時間であるというふうに思います。

次に「支援者としてのやり甲斐と成長」について考えてみたいと思います。

子どもが多様な支援者と関わりあう地域の中で、学んだり遊んだりすることによって、どんな子どもへの影響があり、そこには支援者としてのどんなやり甲斐と成長があるのかを、皆様と一緒に考えてみたいと思います。

まずは、斜めの関係性の大人たちが学校教育の中に「チーム学校」の一員として入って行くことが求められています。その一方で学校外、放課後の子どもの支援を行うことが求められています。子どもの居場所づくりの重要性についてお話をしていきたいと思います。

このイラストは例えば宿題をみてあげている地域の大人であるとか、昔遊びを一緒にしたり、放課後の学校施設を有効に使って校庭開放ですね、校庭で子どもたちと一緒に遊んだり、いろんな放課後の子どもたちの充実した姿がみられます。

この子どもの居場所について考えていきたいと思いますが、こちらにご紹介していますのは子どもの居場所認識に関する調査結果です。

これは、『令和3年度子ども若者白書』より抜粋したのですが、子どもが自分の居場所だと認識する場所とはどこかという事です。上の青いグラフで示したものがコロナ前です。赤い方がコロナ禍に入ってからデータです。コロナ前よりコロナ禍の方が子どもたちが自分の居場所と認識する場所が減っていることがわかります。一番下のグラフは子どもがどこにも居場所がないと回答した数値です。

これを見ますと、子どもが自分の居場所だと一番認識しているのが「自分の部屋」、次いで「家庭」、「インターネット空間」です。こうしてみますと、「家庭」という

のは子どもにとって主たる場所ですが、家庭というより自分の部屋と答えているのがわかります。

「インターネット空間」に自分の居場所を見出していくというお子さんが半数以上いるという事も特出すべき観点かと思えます。

「地域」が居場所と答えているお子さんより「インターネット空間」が居場所だと答えているお子さんが多いのです。なので、子どもの育ちを考えるうえで、「インターネット空間」はなかなか大人たちには見えづらい所で、最近のいじめ問題は「インターネット空間」で起こっているものがたくさんあります。なかなか教員や大人が確認しづらいところです。そこでどういうふうに子どもたちが犯罪に巻き込まれないようにするか手段をしっかりと考えていく必要があるのではないかと思います。

この地域に居場所があると答えている子どもがだいたい53%いますが、青少年の中で積極的に地域に出て行って、大人たちと一緒に地域作りをしている中学生、高校生、大学生がいます。私は川崎市に関わっているんですけども、そちらで活動している中学生、高校生、大学生で『ソーシャルデザインセンター』があるんですが、地域づくりについて、地域に必要なものは何か、地域をもっと活性化するために何をしたらいいのか、ということ話し合う地域の公民館のところに積極的に関わる子どもたちの調査にこの夏に3回ほど行ったのですが、その時に「何であなたたちはこういう所に参加しているのですか？」と質問してみたら、まずそういう質問をされると「自分たちが地域の子どもたちの中で意識高い系と思われていて、そういう見方をされるのが嫌です」と言われました。自分たちが楽しいからそういう所に出ているのであって、学校や家庭では出会えない面白い人たちがいて、いわゆる斜めの関係にいる大人たちが自分たちと同じ立ち位置でいろんな話をしてくれるから参加していると話してくれました。

まず、みんなで地域のイベントをやるのですけれども『子ども食堂』と一緒にやってみたり、地域のお祭りをやってみたり、子どもの発案でそういう事をしているんですけども、そういった楽しみの先にやり甲斐がある、地域貢献してるんだなということが後からついて来る。まずは楽しくて参加するので、自分たちは地域が居場所になっているという話を聞きました。地域に子どもたちが関わるということは、地域が楽しい、人との関りが楽しい、面白い大人たちがいることが第一条件ではないかなと思いました。

次に『子どもの豊かな育ちのための放課後の時間を支援する』という事が特にいま求められています。先ほども申しましたように様々な世代や属性の大人たちとの交流がそこにはあります。また横の関係性にある仲間や異年齢の集団との交流というのが放課後の時間にはあります。また教育課程の時間とは違って、ルールに縛られずに子どもたちの創造的な遊びをすることができる貴重な時間でもあります。そこでは自由な創造性というものが尊重されますが、カリキュラム化されない、いわゆるノンフォーマルな学びの機会ではなく、インフォーマルな学びの機会となってくれればと思います。そのためには、大人が手をかけ過ぎない、教え込み過ぎない、管理をし過ぎないということも重要です。その放課後の時間等で子どもたちがとことん遊び込むということが、やがて大人になったときに自主的に学びに向かう力を育むというデータが出ています。これは非認知スキルの醸成ということに繋がるんですけども、子どもの頃に特定の事に関心を持って、それにとことん取り組む、遊び込むという経験が、ゆくゆくは学びに向かう力、集中力を高めるというデータがありまして、この非認知スキルというものが、例えば先ほど川崎市の事例をお話ししましたが、子どもたちが自分たちで企画したものを地域の中で実現化していく、追求していくことができるとい

う過程で非認知スキルが醸成されていると考えられます。具体的には、青少年の意欲とか、いろいろな人と語り合う、意見交換し合う、ぶつかり合う事によって育まれる協調性それから粘り強さ、忍耐力、計画性とか、それから時には自制心、創造性、企画力とかこういった能力全般を包括するようなものを非認知スキル、非認知能力と言います。その斜めの関係性にいる子どもを支援する大人たちがどういうふうにも子どもたちの非認知スキルというところに関わっていけるかということが、子どもをサポートする上でのキーワードになってくると思います。

最後にまとめになるのですが、『子どもにとって支援者とは』どういう人たちかとあるんですが、まずは斜めの関係の中にいる大人、子どもを評価しない、利害関係のない近い大人が重要な存在です。その斜めの関係性にいる大人は子どもを多角的に見ることのできる大人であると思います。一定の評価のついた見方ではなく、子どもの新たな側面を発見してあげたりとか、いろいろな子どもの言動を見てあげられるような人であると思います。

また子どもにとって身近な社会人、職業人でありますので、日常的に子どもにとって職業感や勤労感を育むようなそんな存在であると思います。それからそういった大人たちに日常的に声をかけられることで自己肯定感というものが育っていきます。やっぱりこれは日々の積み重ねの中であって、地域の大人たちに気にかけてもらえる、大切にされているんだなという認識が生活の中で育っていくということが必要なのではないかと思います。

その一方で、支援者も子どもと関わっていくことでやり甲斐というものを得られると思います。

いわゆる大人たちにとっては『自己実現』といった視点を子どもたちと関わることで獲得することができるのではないのでしょうか。例えば、地域の顔見知りの人が増えるということは、地域の防災体制の仕組みを作る事に必要です。学校を通じて子どもを支援することでそういった地域の繋がりが増えていくことが期待されています。また、挨拶が増えるので、日常が活性化していくことや、大人たちにとっては自分たちが経験したこと、生活の中で学んだことを子どもたちに還元していくことで、社会に適切に自分の学びを生かすことができる取組とみなすことができます。

教育基本法の第三条に『生涯学習の理念』の中に大人たちが今まで学んできたことを適切に生かす社会の体制づくりというものが求められています。例えば、いろいろな職業、生活を通じて大人たちが学んできた事を学校という場を活用して子どもたちに還元していくことも書かれています。それから支援者として活動を行うことが地域貢献、社会貢献の実践につながるという視点が得られます。例えば、子どもの支援者がこのような自己実現の視点を有したときに学校から頼まれてボランティアをするというだけではなくて、自分と学校との関係性が双方向的な関係になるということで、ここで協働関係というものが構築されていくのではないのでしょうか。

支援者による一方的な子どもへの支援関係から協働関係になることが地域の教育力を醸成していく上で必要な視点だというふうに考えております。

最後に、京都のコミュニティスクールの調査に行ってきたのですけれども、少し観光をしてきました。こちらはあるお寺で撮った写真なんですけれども、真ん中にあるのが七福神の布袋さんで、周りで子どもがたくさん遊んでいます。これは平安時代の絵らしいのですが、隣に解説がありまして、大人が笑顔でいると周りにも子どもにも笑顔が伝播して自然に楽しい社会がつくられていくような事が書かれていました。今日お話しさせていただくテーマにとっても合っているなと思ひまして、写真を撮って資料にはありませんが投影させていただきました。

大人が笑顔の地域社会というのはその雰囲気子どもにも自然に伝わって子どもをみんなで包み込むような雰囲気ができていくのではないかと思います。私の話はここまでとなります。ご清聴いただきまして、ありがとうございました。

会長：柴田先生、どうもありがとうございました。とてもわかりやすい内容で参考に関係になるかと思えます。長い時間ありがとうございました。

先生：ありがとうございました。

会長：それではこの後質疑応答で、皆さんからご意見、また柴田先生にご質問等がありましたらお聞きしたいと思えますが、いかがでしょうか。

委員：いいですか？子どもの居場所についての調査がありますね。この中で地域と学校を比べましたら学校のほうが少し低いようなのですが、どうしてでしょうか？

先生：理由ですか？

委員：はい

先生：学校を居場所として認識していない子どもが半分はいるということですよ。理由についてはちょっと個別に聞いてみないとわからないのですが、なぜでしょうか。やはり私が学校訪問させていただいたりとか、それから教職員の方とお話ししたりとか、地域を支援する方とお話しさせていただく上で感じていることは、やはりいろんな原因で学校がつまらなくなっている。例えば友達関係とか授業についていけなくなって授業の時間が苦痛だと思ってしまうとか、いろんな原因があるかと思えます。授業がつまらないと学校が居場所だとは思いませんし、また友達関係がうまくいかない、先生との関係がうまくいかないことも理由になると思えます。

委員：子どもの居場所の子どもの範囲ってというのは？

先生：18歳までの範囲。ランダムな調査のようです。

委員：たぶん年代によってで、小学校では子どもの居場所があるのかなと、ただ高校へ行くと居場所が少なくなるのかなと。その年代的な傾向はどうかと思っています。

先生：はい、そうですね。恐らく年代が上がるにつれて、学校を居場所だと思わない子どもが増えると思えます。

委員：コロナ禍でインターネット空間を居場所と考える子どもが増えるのかと思ったのですが、そうでもなさそうですね。

先生：そうですね。

委員：居場所がないという人が増えているのがあれですけども。減っているのは同じような傾向だったので。

先生：どこにも居場所がないと答えている子どもが5.4%ということは、ちょっと気になることです。

委員：今のところですが、左下の職場ってなんでしょう。

先生：中学校を卒業して、働いている。

委員：ですよ。だと思ったんですけども、だとすると、子ども若者白書のこの統計の対象年齢は何歳から何歳？

先生：小学生から18歳というふうになっています。

委員：18歳。

先生：そうですね。18歳までですね。

委員：そうすると相当今までの話の、その小学校中学校を中心にお話しされたところと大分違う数字なのかなというところは私は思います。私は高校にいたものですから、そういう感じがします。あと帰属意識というところですけども、これが子どもらにとってのものすごく鍵となるポイントの部分で、いじめにしてもその帰属意識っていうものがたいそう彼らにとっては大きな価値のある。逆に言えば安心して帰属することが

できる場所があるからこそ外に向かっていくことができる。これは昔から心理学のほうで言われていることですが、安心して帰属する場がない、その不安を抱えていけば外へは出ていけないですよ。それを当たり前のこととしてやっぱり考えなきゃいけないんじゃないかなというふうに思いました。

先生：貴重なご意見だと思います。どこかしらに若者、子どもが心が落ち着く場所というのがないと、他で何をするにも不安な状況でそれこそ一生懸命頑張ろうという勇気も湧いてこないのではないかと思います。

委員：もう1点よろしいですか。七五三現象という形でもって言われましたけれども、その言葉自体が使われてるのは30年ぐらい前からですよ。

先生：そうですね。

委員：そして数字はもう全然逆転してますよね。数字自体が若者たちの離職率、半年もたない若者が何割いるかと言った時に、3割では全然ないですよ。

先生：大学生の数字ですか？

委員：就職してからそこで半年もたない人がどのぐらいいるかといった時に、これはもう3割では全然ない。もっともっと多い。

先生：そうですね。大学を卒業して早期離職する人の割合は3割というふうに言われてますけれども、中学高校は中学では7割、高校では5割というふうに聞いています。

委員：あの大学で3割という数字がうそだと私は言っているです。

先生：もっと多いと言うことですね。

委員：そうではないというほうがいくらでもあることですから。ですからその部分は違うんじゃないかなっていう事。あと、そのキャリアを考えさせるということ、キャリアを考えて自分がなりたいものというイメージが消えていくというふうな数字がありましたけれども、それについても子どもが社会を理解するにつれて、どこに参加していくのかということ具体的を考え始めるにつれて、具体的なイメージを求めてはつきりしなくなってくる。これは中学から高校に来る年齢でも当たり前のこと。今までは大学生ですらそういう状況にあるということだと思っただけですね。ですから、その自分の夢を実現するためにという言い方でキャリアは語れない。だからその小学生ぐらいにああいうことを聞くのは、それはそれとしての意味があるだろうけれども、現実問題彼らの人生を考えた時にはそれでは語れないものだろうというふうに思っただけですね。キャリアについてもコーディネーターと言われましたけれども、キャリアカウンセラーたちの言葉っていろいろあるわけですよ。プロのキャリアカウンセラーたちがどう考え、どう働くのかというところで考えると、小学生の就職に向けての意識と、自分が何をしたいのかという事ではなくて、どう理解をさせるかっていうところのほうにもっともっと重きを置かなければいけないのではないかと。自分がどこに参加していくのかっていうことを、つまり社会を知るということを、それを置いて個々の個性個性というありもしないものを騒いでいるという部分というのはものすごく大きいと思っただけですね。

先生：そうですね。やはりいろんな大人たちとしっかり話し合っ、一つの職業に一つのレベルを貼らないで、同じ職業でもいろんな大人の人と多くの社会人講師と話し合う。徹底的に話す。例えば中学校の時に今と違う職業を思いえがいていたとか、違う事に一生懸命取り組んでいた。それがどんな職業になってもいま役に立っているとか、やりたいことばかりではなく職業を行ううえでの苦労があったり、失敗をしたり、いろんなその人生経験を子どもが大人たちと話し合うという機会を、今求められているとおもいます。特にその職業的なビジョンをしっかりと若者が描くということが大事という事ではなくて、いろんな生きざまを子どもたちが知る。そういうことが今求めら

れていることであって、どういうふうな思考回路で自分が大人になっていけばいいのか。そこにどういうふうな取り組みをしたらいいのか。自分としっかり向き合って、日頃子どもたちも忙しい生活を送っていると思うのですが、いったんそれを堰き止めて、じっくり自分と向き合う時間を求められているのではないかと思います。そこは支援する大人たちがおおきな役割を担っていく必要があるのではないかと思います。

委員：すいません、いっぱいしゃべっちゃって申し訳ない。最後に一つ。国分寺市の課題だと言われたところがありましたよね。他市に比べて国分寺市の特徴で課題であると言われたところについては、やはりこの会でみんな考えて、何ができるかということの問題視していくべきではないだろうかというふうに思いました。お話でもその障害児の宣伝となっているところでの情報不足というお話でしたけれども、これも障害に限らずその施設の子どもについても全く同じことも言えると思うんですが、いわゆる18歳の壁ですよ。そこに対して他の市ではやれている事がここではやれていないという指摘を受けたわけですからなぜだろうか、そして何ができるだろうか、考えていくべきではないかなと思いました。ありがとうございました。

先生：ありがとうございました。

委員：先ほどですね小中一貫教育とおっしゃったんですけど、それだけ聞いてますと私立中学校、小学校に行ったほうが良いという人は結構いるわけです。それについて、どういうふうに考えていったら良いですか。

先生：私立の学校を選択するご家庭も、国分寺市にも一定数おられると思います。やっぱり公立の小学校、中学校の魅力をしっかりつくっていくのが、必要だと思いますし、最近、防災という観点から考えた時に、公立の学校に通わせるのが安全だと考える親御さんも出ていと聞いております。地域の中で子どもたちを育てるといった面で、私立の地域の大人たちが関わっていくということは難しいように思います。私立の学校にその地域の大人たちが入っていけるような状況ができれば理想的かもしれませんが、実際は私立の学校では企業とか特定の組織が関わって子どもたちを支援していく。小中一貫教育が進められている背景には、中学校1年生になった時の課題を緩やかに、小学校6年生位から対策をしていくことや、地域づくりというところと絡めて共助の仕組みをつくっていくということ、子どもの育ちを地域の方が応援していくことが必要だということで、ある自治体では学校選択制を廃止して、小中一貫教育の体制を作っていく取り組みをしています。小中一貫教育を進めるかどうかというのは、地域の大人たちが子どもたちをどう育てたいかという協議をする、しっかり話し合う、そして決めるというのが大事だと思いますので、何がなんでも小中一貫でやらなければならないというわけではないです。地域性によるところもあります。

委員：ありがとうございました。

委員：いいですか。その子どもにとって斜めの関係の支援者がとても大事だってことがとてもよくわかりました。その支援者はどういう人なのか。例えばお年を召した地域にいるおじいちゃんとか、具体的にどのような方をイメージしてらっしゃいますか。

先生：イメージというか、実際に斜めの関係性の大人として子どもを支援している大人たちは、例えば保護者のOBとかOGの方、自分やわが子が学校を卒業してもその学校と関わり続けている保護者の方たちであるとか、地域の公民館などで囲碁や絵画などのいろいろなサークルの方たちが学校に関わったりとか、そういう個人であったりサークルのような団体であったり、いろんな繋げ方があると思うんですが、やはりそこで重要な役割を果たすのが、地域学校協働活動推進員と言われている方たち、コーディネーターです。

委員：子どもたちの居場所が必要だと思っている方がたくさんいらっしゃると思うのです。



親御さんも皆さんお仕事なさってたりして、放課後の時間が気になっていらっしゃると思うので、どうやって支援者を増やしていくかというか、みんながそこに興味を持ってもらえるように、地域の問題として居場所をつくって、支援者を増やしていくことが、これから子どもたちを育てていくためにとても必要だと気づいているのですけれども、だから地域コーディネーターの方だけに頼るのではなくて、何かしらいい方策がないかなと思います。居場所っていても神社の境内とか、公民館とか児童館とかいろいろ考えられるのですけれども、すごくいろんな子どもがいるので、そこには行きにくい子どももいれば、例えばコンビニの前だったら楽しくできる子どももいるわけです。だから何か地域みんなでそれを考えていきましょう、という方策を考えたらいいなと思います。

先生：そうですね。例えば、自治体が旗振り役をして支援者を育てる研修や養成講座をやっているところがあったりしますが、やがてそれはその支援者同士が学び合う場になっているところもあったりしまして、一人の支援者が周りを巻き込んで、またさらにその支援者が自分の周りを巻き込んでというように、ちょっとずつちょっとずつ支援の輪が広がっていけばいいなと思います。

委員：今日貴重なお話ありがとうございます。私PTA担当をやらせていただいているというのものもあるかもしれないんですけど、やっぱり子どもに支援者が必要だなというふうに思ってます。そのときに支援者は特にその世代とかを決めつけなくても良いと思いつつ、やっぱり子どもがこれから大きくなって働いていくという事を考えると、リアルに働いている人の支援者をもっと増やすべきじゃないかなと思っています。そう考えると自分の親とか、自分の通っている学校の親保護者たちはリアルに働いてるんですよ。30代40代50代の。そういったリアルに働いてる人たちの何か経験とか見識とか、何か子どもたちに伝える場とか環境、それはリアルだけじゃなくても、子どもたちってインターネットという居場所を持っているのなら、インターネットでそういう場をつくる。リアルではなかなか設けられないならばインターネットで取り決めるのもありでしょうし、私が思ったのが私の子もそうですけど進路を考えるときにちゃんとわかんないんですよ。例えばうちの子は今度小6で中学校は公立の予定なんですけど、単純に周りの情報がない中で自然に公立となりがちなんですけど、私立と公立のそれぞれの特徴とかメリット、デメリットっていうのは子どもたちはわからないと思います。昔、個別指導塾の講師もやっていましたけれど、「勉強していい大学に行くためには私立」、いろいろな考え方がありますがけれども、偏ったイメージ、偏った情報だけで「私立受験した方が将来いいですよ」とか、それはそれでいいんですけど、それぞれの良さ、メリット、デメリットをきちんと客観的に子どもたちに伝えて、と僕は一番大事だと思うんですけど、子どもたちがどうしたいかを判断できるための情報提供、もちろん大人が何も伝えないと、子どもに単純に夢は何とか何がやりたいとか言ってもわからないですよ。情報がないのだから。これにも書いていただけてますが、ほかの生きざまを見せるというのももちろん大事なんですけど、子どもが大きくなっていろいろ選択していけるための情報提供と子どもたちの理解を何かもっと積極的にできるような環境がつくっていけると良いのかなと思っています。なので、学校でももう少し、ママさんは結構頑張ってらっしゃるけれど、パパさんはどうしてもお仕事があるからどうしても。本当は男女平等なのだと思いますけれども、傾向としてはママさんは学校の活動に関わっていますが、パパさんはどうしてもなかなか参加しない現状があるんですね。そこはもう男女関係なく、子どもたちのためにそういう仕事の情報とかも含めて何か大人がサポートしていけたらいいなと思います。

先生：ありがとうございます。

副会長：すいません。どうしてもぜひお聞きしたいなと思って。今の話と重複するのもたくさんあるんですけども、先生のお話いただいた地域コーディネーターの役割は、やはりすごく大事なというふうに思ったのですが、具体的に実際にそういう地域コーディネーターというものを取り入れていこうっていう考え方が、学校のほうに浸透してきているのかどうか是非お聞きしたいなと思ったのと、あともう1点、例えば先ほどチーム学校自体の教育支援者の現状という具体的な例を挙げていただいたかと思うんですけど、その中にこれが地域コーディネーターと地域学校協働活動推進員さんがそういったものがそれに当たるのか、他にも実際に実践例みたいなものがあるのかどうか是非お聞きしたいと思いました。

先生：地域コーディネーターにつきましては、従来は学校の先生方の分掌で副校長先生が担うケースが多かったのですが、現在ではもちろん地域の方とその教員がつながることは大事ですが、そこに地域についてしっかりと精通した地元をよく知るコーディネーターさんを配置した方がよいという流れになっています。例えば国の方ではコミュニティースクールマイスターっていうような言い方をして、そのマイスターの方たちを一定地域に数名配置して、例えば地域コーディネーターを養成するような講座をマイスターが講師となって開催していたりします。また、自治体ごとにコーディネーター養成講座を持っていたりします。

例えば、東京都には2名コミュニティースクールマイスターの方がいらっしゃいますが、こちらはもともと専業主婦の方で子どもの支援をPTA活動に端を発してやっていく内にさまざまな地域の役割を担っていった、例えば民生児童委員さんとか、地域で障害者支援活動をしていこうということでNPOを立ち上げた方とか、そういった方たちが担っているケースが多いです。それがだんだん生業になって、自分の子どもが育った後に地域の子どもの支援するというところに人生をシフトして活躍されている印象があります。

副会長：ありがとうございます。コミュニティースクールマイスターは学校の先生が担うのではなくて、その地域の方がきちんと担って、その方が中心中核的な立場として学校と連携し、かつ地域とも繋がっていくというそういう枠組みはとっていい良いなというふうに思いました。ありがとうございます。

会長：いま東京都で2名とおっしゃいましたが、これからどんどんそれを増やしていく形になるのでしょうか。

先生：コミュニティースクールマイスターを増やすかどうかはわからないのですが、マイスターというより各地域に核となるようなコーディネーターさんがいらっしゃって、その自治体で行っているコーディネーターさんの養成講座を企画したり、仲間同士で講義の内容を検討したりとかしています。

会長：ありがとうございます。

事務局：ほかに

委員：今の事と若干関連するかもしれないですが、これは情報共有することなのですが、去年国分寺の社会福祉協議会というところから今後PTA連合と連携していきたいと話があって、中学校の不登校問題とか含めて、もっと子どもたちにその保護者を通じたもしくは学校を通じたサポートを社会福祉協議会としてもやって行ってほしいので、どうしても学校とかPTAとか子どもたちの情報がなかなか取りきれてないという事なんです。これからおっしゃったような地域コーディネーター活動をやっていく上で、もっと子どもたちの現状とか学校の状況みたいなのところの情報共有をどうやっていくのが課題かなと思います。

委員：社協には地域コーディネーターがいらっしゃるのですね。東地区と西地区と分かれて

- それぞれの地区をいろいろな地域の問題を一緒に考えていく方がいらっしやいます。
- 会 長：ただ、子どものことだけではなく全面に関しての地域福祉コーディネーターですね。
- 副会長：福祉の面でのコーディネーターと地域を結び付ける社協さん行政サービスのソーシャルワークというかわりだと思しますので、またちょっと学校にいる子どもたちの学びと結びつけるコーディネーターとちょっと違うかもしれないですね。
- 委 員：ただ放課後の居場所づくりについては私も関わっているんですけど、地域コーディネーターの方は地区の居場所をどういうところで活動してるって事まで全部把握してくださっているんで、そういう人たちをどんどん使っていけたらいいなと思います。
- 先 生：そういうコーディネーターたちが活動しやすい環境も必要かもしれません。
- 会 長：私も委員と地域は違うんですけど、同じようにその居場所づくりっていうのを立ち上げてまだ活動し始めたばかりなんですけど、なかなか場所がないんです。まずそこからなんですけれども、でも本当にできればお話の通り地域の支援者みたいな形で子どもたちに還元できる事があるといいなと思いますし、皆さんや先生のお話や御意見を聞いて、地域としてのそういう力が必要ですし、すごく大きなことなのでちょっと大丈夫かなっていうふうには思いますけど。
- 先 生：それが有志の方たちが安心して子どもの支援ができるように、例えばその時間帯に3.11の時のような災害が起きた時にどう対処するれば良いのか、あるいは障害を持ったお子さんと他のお子さんがもしトラブルになった時に、支援者はどう関われば良いのかとか、そういうふうな研修とか情報提供を支援者の方たちにして差し上げると安心してそういう方たちも活動できるので、そういうサポートも必要なのかなと思います。
- 委 員：そういうのは誰がやればいいのでしょうか？
- 先 生：例えば三鷹の場合だと自治体です。
- 会 長：ありがとうございます。ほかによろしいでしょうか。それでは、最後に副会長からあいさつをお願いします。
- 副会長：先生、今日は忙しい時間の中で貴重なお話をいただきましてありがとうございました。本当に皆様から活発にいろんな御意見があったことが全てかなと思います。学校という子どもたちの重要な居場所に地域はどうやって関わっていくかという視点がやっぱり大事なかなと思いました。やはり地域で子どもたちを育てていく中では子どもたちと地域の方が対等に関わっていくようないろんなメニュー、チャンネル、場所、そういったものをいろいろとできる限りでやっていく事が子どもたちの成長につながっていくのではないかと感じた次第でございます。またいろいろご支援いただくこともあるかと思えます。今後ともどうぞよろしく願います。
- 今日はどうもありがとうございました。
- 会 長：お疲れ様でした。長時間に渡り途中休憩も挟まず、すいません。じっくりとお話を聞くことが出来ました。一応、式次第ではその他で『感想・意見交換』とありましたが、今皆様からいろいろお聞きしましたので、次回から新年度令和4年度第1回になります。今回の講演会の皆さんの意見を踏まえて次年度を進めていきたいと思えます。最終的には何か成果物をとっていますので、そこら辺のところも踏まえて、また皆さんで考えていただいて次回の令和4年度第1回目協議会のほうを進めて行きたいと思えます。よろしく願いいたします。
- それでは事務局のほうから連絡事項ないでしょうか。
- 事務局：今年度の会議は今回で終わりになりますので、令和4年度第1回目の協議会の日程につきまして、何月頃とかいただければと思います。

- 会 長：予定ですと、4月の下旬と書いてあったのですが、5月の方が良いですか？皆様ご都合いかがでしょうか？
- 委 員：具体的に成果物とかのゴールは今年の何月ぐらいまでに形ができていれば良いのかなとかそういうものがあれば逆算して早く始めたほうが良いなら、4月の終わりくらいかな。
- 会 長：一応事務局のほうから最初にいただいた活動計画としては、令和4年度の第1回が4月の下旬になっておりまして1番最後にまとめが11月から12月になっているんですね。でも成果物自体は第3回の9月から10月のここにはもう既に出来ているべきなので、それまでに回数が5回になりますが、最後から2番目の回ぐらい出来てないと計画としては、5回ですとやっぱり4月の下旬とかですね。
- 事務局：4月下旬位もしくはゴールデンウィーク明けぐらいは一度お集まりいただきまして、成果物をつくるにしてもこちらの状況と資料を準備したりとか、こういう物を探してほしいというようなものがあれば準備しながら、遅くても5月のゴールデンウィーク明けくらいまでには一度させていただいて、いま会長がおっしゃられましたように11月頃にはもう成果物が出来て市民の方たちに配布なり掲示なりできるような状況が一番理想的かなというふうには考えております。
- 会 長：場所はもう取れるんですか。
- 事務局：日程や時期などを教えていただければ、まず会場を探させていただいて、またメールか何かでお送りし、一番参加いただける方が多い日をこちらのほうで決めさせていただいて、最後ご連絡する方法はいかがでしょう。
- 会 長：それをお願いします。
- 事務局：あと、本日の講演会をお聞きになられまして、次回までに何かこういう資料を御準備していただけるかというようなものがございましたらお教えていただければ、そういったものを合わせまして準備し、次回の会議に御提出をさせていただければと存じます。もし本日出なければ、日程のメールをお送りさせていただきました際にお教えくださいますようよろしくお願いいたします。
- 会 長：それでは時間が延長してしまいましたが、以上をもちまして本会議を閉会いたします。本日はお疲れさまでした。ありがとうございました。

—了—